ディルムンを掘る
―バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト 2024 ―

安倍　雅史　東京文化財研究所保存計画研究室長
笠原　朋与　奈良文化財研究所アソシエイトフェロー
長尾　琢磨　東京文化財研究所研究補佐員
神野　健太　慶應義塾大学文学部学生

Archaeological Research on Dilmun: The Bahrain Wadi al Sail Archaeological Project 2024

ABE, Masashi　Head, Conservation Design Section, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
KASAHARA, Tomoyo　Associate Fellow, Nara National Research Institute for Cultural Properties
NAGAO, Takuma　Research Assistant, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
JINNO, Kenta　BA Student, Faculty of Letters, Keio University

1. はじめに

ディルムンは、メソポタミアの文献に登場する周辺国の１つであり、前２千年紀前半にメソポタミアとインダス、オマーン半島を結ぶ海上交易を独占し繁栄した王国である。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーンが、このディルムンの中心地に比定されている（**図１**）。

ディルムンの栄華を象徴するのが、バハレーンに残

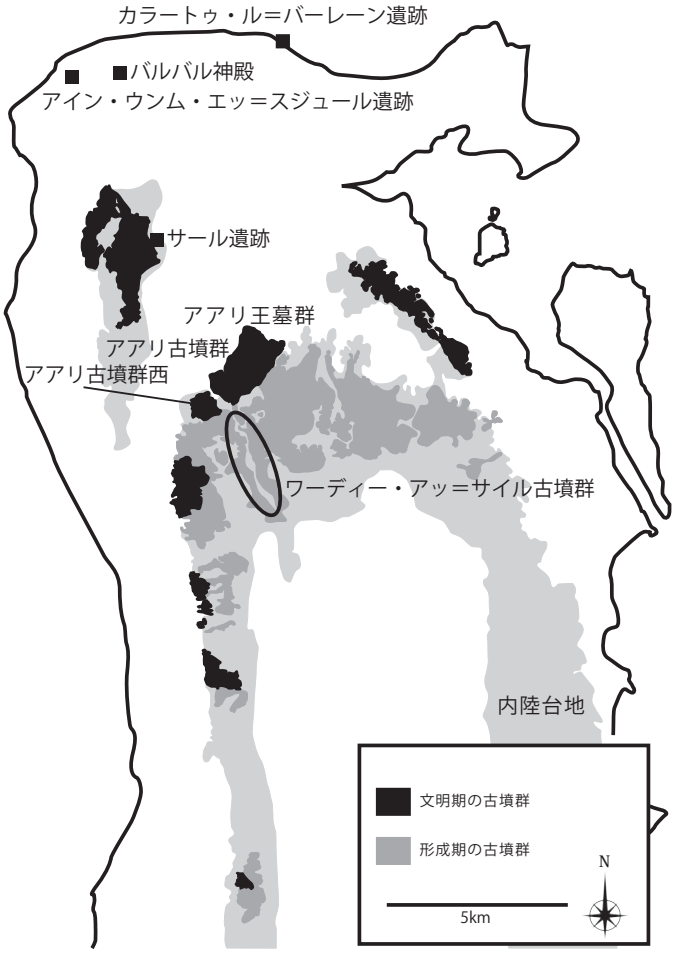

図１　バハレーンに残るディルムンの遺跡

図2　カルザカン古墳群

されている古墳であり、バハレーンには、前2300年から前1700年にかけて7万5千基もの古墳が築造された(**図2**)。

2. ワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査(2015年～2024年)

ワーディー・アッ＝サイル古墳群は、バハレーンに唯一現存するディルムン形成期(前2300年～前2050年)の古墳群である(**図3**)。形成期は、ほぼ無人の土地であったバハレーンに、どこかしらの土地から大規模な移住があり、新たに入植した人々がディルムンの礎を築いた時代である。彼らは、バハレーンに定住し、小規模ながら集落を築くとともに、古墳の築造を開始した。

ワーディー・アッ＝サイルは、バハレーンの内陸台地を南から北に流れる全長4kmほどの涸れ川であり、この両岸にかつて数百基の古墳が存在したことが知られている。

私たちは、この古墳群において2015年から2024年まで、計8シーズンにわたり発掘調査を実施した。発掘した古墳の総数は、計46基にのぼる。

図3　ワーディー・アッ＝サイル古墳群

2024年の第8次調査をもって、ワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査を終了したため、本稿では、この古墳群の発掘調査を通じて、ディルムンに関してなにが明らかになったのかを紹介したい。

2.1　形成期の古墳に見られる階層性

従来、形成期の古墳には階層差がないと考えられてきたが、私たちの調査によって、少なくとも3種類の古墳が存在することが判明した。大半の古墳(一般墓)は直径が5m～7m程度であるが、100基に1基ぐらいの割合で直径が10m～15mにおよぶ大型墓が存在する。さらに、大型墓の一部は、周壁をともなっている(**図4**)。また、一般墓と、大型墓／周壁付き古墳では立地も異なっている。一般墓が涸れ川の斜面に立地しているのに対し、大型墓と周壁付き古墳は、見晴らしの良い、斜面の一番高いところに位置している。

2.2　ディルムンの起源に関して

ワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査の一番の成果は、ディルムンの起源がメソポタミアの文献に、マルトゥ／アムル(アモリ人)の名で登場する西アジア内陸砂漠北部(シリア砂漠・アラビア砂漠北部)に暮らした遊牧民にあることをつきとめたことである。

バハレーンでは、形成期より前の時代に、人が居住した痕跡がきわめて希薄である。そのため、形成期に、バハレーンに大規模な植民があったと推定されている。それでは、この入植者たちは、どこからバハレーンに到来したのか？私たちは、ワーディー・アッ＝サイル古墳群と周辺地域の墓制を比較することによって、西アジア内陸砂漠北部に広く分布する古墳群が、古墳の

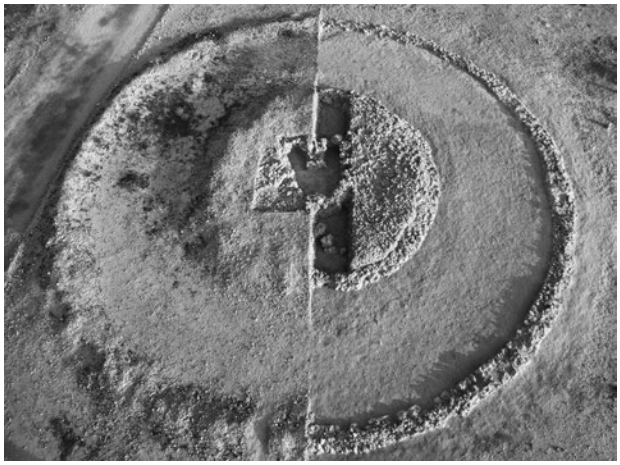

図4　ワーディー・アッ＝サイル古墳群で確認された周壁付き古墳(Steffen Laursen博士提供)

築造方法や、一般墓と大型古墳、周壁付き古墳からなる階層性を有する点で、ワーディー・アッ＝サイル古墳群にきわめて類似していることを明らかにした。

私たちは、アモリ系遊牧民が形成期に西アジア内陸砂漠北部から海を渡ってバハレーンに移住したと推測している。ワーディー・アッ＝サイル古墳群で確認された周壁付き古墳もきわめて遊牧民的な墓で、おそらくバハレーンへの移住を率いた遊牧部族長の墓ではないかと想定している。

2.3　バハレーンへの移住のタイミングに関して

従来、バハレーンへの大規模な植民は、前2200年ごろに起きたと考えられてきた。そのため、この植民は、地球規模で寒冷・乾燥化した4.2 kaイベントにより引き起こされたと解釈されてきた。

しかし、古墳に埋納された獣骨（調理されたヒツジ／ヤギ）に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を進めた結果、ワーディー・アッ＝サイル古墳群の開始年代は、従来言われていたよりも100年ほど古く前2300年ごろ、あるいはそれ以上古くなる可能性が判明した。これにより、バハレーンへのアモリ系遊牧民による大規模な植民は、4.2 kaイベントとは無関係であることがわかってきた。

2.4　ディルムンの未成人墓の解明

私たちは、第6次調査より、ディルムンの未成人墓を中心に発掘を行ってきた。ディルムンの古墳のなかに、子持ち古墳と呼ばれる古墳が存在する（**図5**）。子持ち古墳とは、主要な古墳に小古墳が1つあるいは複数付随した古墳である。

従来、小古墳を伴わない単独の古墳あるいは子持ち古墳の主要古墳には16歳以上の成人が埋葬され、子持ち古墳の小古墳には乳児から15歳までの子供が埋葬されていると主張されてきた。

しかし、私たちの調査によってディルムンの未成人墓ははるかに複雑で、未成人でも6歳前後で大きく埋葬方法が変わる可能性があることが判明した。

図5　典型的な子持ち古墳

3.　アアリ古墳群西の発掘調査―最初期のディルムン王墓の発掘―（2025年～）

私たちは、新たに研究費を取得し、2025年からアアリ古墳群西の発掘調査を計画している（**図1**）。目的は、ディルムンにおける王権の発達を明らかにすることである。

ディルムンがペルシア湾の海上交易を独占した文明期（前2050年～前1700年）になると、バハレーンでは社会が複雑化し、王都や神殿が築かれるとともに、新たに計10の古墳群が形成される。とくにアアリ古墳群の北辺には、直径が50 m、高さが10 mに達する巨大古墳が十数基造営され、ディルムンの王の墓だと考えられている（**図6**）。そのため、この墓域はアアリ王墓群と呼ばれている。

かつてステファン・ラウルセン（Steffen Laursen）が、アアリ王墓群で総合的な調査を実施し、ディルムンの王墓の特徴を明らかにしている。王墓の特徴の1つが、周壁であった。現在は開発によって失われているが、アアリ王墓群の王墓は、もともとは直径100 m、高さ2 mもの巨大な周壁によって囲まれていたことがわかっている。

この周壁の存在は、ディルムンの王墓が、形成期の

図6　アアリ王墓群（Steffen Laursen博士提供）

ワーディー・アッ＝サイル古墳群の周壁付き古墳から発展したものであることが示している。しかし、アアリ王墓群とワーディー・アッ＝サイル古墳群の周壁付き古墳とでは、その規模に、あまりにも隔たりが大きい。そのため、ワーデイー・アッ＝サイル古墳群の周壁付き古墳から、いきなりアアリ王墓群へと発展したとは考えにくい。

しかし、近年、アアリ古墳群の西側（アアリ古墳群西）に残されている6基の古墳が、両者を結ぶ中間的なものとして注目されている（**図7**）。これらの古墳は直径が25 m程度で、周囲を直径50 mほどの周壁によって囲まれている。これら6基の古墳は、アアリ王墓群に先行するディルムン最初期の王墓群である可能性が高く、形成期の遊牧部族長が文明期になり王へと変貌を遂げる、その過程を研究できる重要な古墳として学界で注目されている。

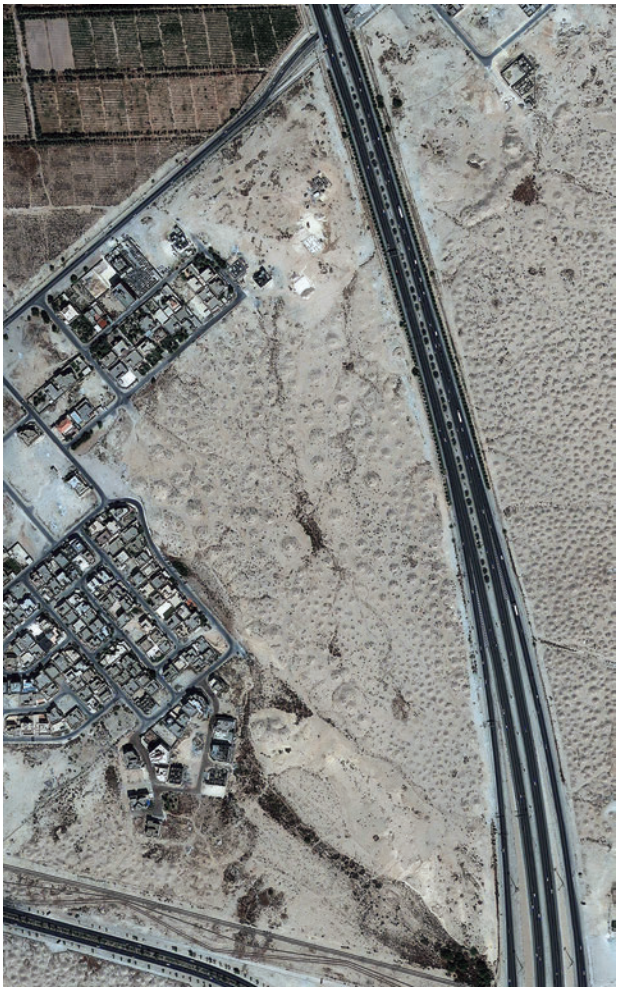

図7　アアリ古墳群西（Salman Almaharai 博士提供）

私たちは、今後、アアリ古墳群西で、これらの古墳を含む十数基の古墳を発掘し、ディルムンにおける王権の発達のプロセスを研究したいと考えている。

4. まとめ

私たちは、10年におよんだワーディー・アッ＝サイル古墳群の調査を無事終了し、2025年からはアアリ古墳群西にて新たな発掘調査を開始する。アアリ古墳群西には、ディルムン最初期の王墓と思われる古墳が存在し、発掘が楽しみである。

なお、バハレーンで発掘調査を実施するにあたり、バハレーン文化古物局のハリーファ・アハメド・アル・ハリーファ王子（H.H. Shaikh Khalifa Ahmed Al Khalifa）またサルマン・アル・マハリ博士（Dr. Salman Al Mahari）から多大なご支援、ご協力を賜っている。この場を借り、感謝を申し上げたい。

なお本論考は、科研費基盤研究（B）「ディルムン文明の起源―バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究―」（研究代表者：後藤健）および基盤研究（S）「中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究」（研究代表者：藤井純夫）および基盤研究（A）「ディルムン文明形成に関する考古学的研究」（研究代表者：安倍雅史）による成果の一部である。

■参考文献

・Abe, M. and A. Uesugi 2021 Reconsidering the Date of Riffa Type Burial Mounds in the Early Dilmun Period: New Radiocarbon Data from Wadi al-Sail, Bahrain. *Al-Rafidan* 42: 75–85.
・Abe, M. and. A. Uesugi 2024 Early Dilmun Burial Mounds in Bahrain: The Wadi al Sail Archaeological Project and the Dilmun Mapping Project. *Arabian Humanities (Online)* 19/2024.
・Gotoh, T., Saito, K., Abe, M. and A. Uesugi 2020 Excavations at Wadi al-Sail, Bahrain 2015–2019. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 50: 169–186.
・安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤　健　2017「ワーディー・アッ＝サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』18号　1–15頁。
・安倍雅史　2022「謎の海洋王国ディルムン―メソポタミア文明を支えた交易国家の勃興と崩壊」中公選書。
・後藤　健　2015『メソポタミアとインダスのあいだ―知られざる海洋の古代文明』筑摩書房。